



18 柳蔭馬之図〔富士柳蔭馬之図のうち〕

瀧和亭 一幅 対幅のうち

明治十〜二十年代

絹本着色

本紙一六二・一×五六・三

柳の木の下で、黒と白、二頭の馬が頬を寄せ合い、その手前でもう一頭の薄茶色の馬が佇んでいる。馬の描写は、横長の墨点による黒目や、真ん中から明確に左右へ分かれたたてがみ、そして立体感を表す隈取りの入れ方など、やや異国風の様相を呈しており、これは明らかに沈南

蘋などの明清画の影響を感じさせるものである。

作者の瀧和亭（一八三〇〜一九〇二）は、江戸千駄ヶ谷村に生まれ、早くから大岡雲峰について南画を学んでいたが、二十歳を過ぎた時に長崎に遊学した。そこで和亭は、長崎に来舶していた清の画家陳逸舟、華毘田などと直接交流し、また僧鉄翁のもとで明清の中国画を数多く模写した。その技量は清人にも認められるほどだったという。この長崎遊学を経て、和亭は沈南蘋をはじめとした明清の画風を深く理解したものとと思われる。

江戸時代の南画家と謝蕪村の作品にやはり南蘋風を強く意識した馬図があるが、本図と図様が非常に近く、江戸時代後期から明治時代にかけて、南画家たちの間で南蘋風が広く受け入れられていたひとつの証左となるだろう。

なお、本図は富士を描いた掛幅と合わせて対幅となる作品である。富士と馬という珍しい取り合わせについては、典拠となる前例があるのか判然としない。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に¹出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

こまくら
駒競べ——馬の晴れ姿

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 73

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 黒川廣子
発行 宮内庁
平成二十八年七月九日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sanmonmaru Shōzōkan